



この人を たずねて

筑波大学人間系心理学域 教授

原田悦子氏

インタビュー
望月正哉



Profile — はらだ えつこ

1986年、筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。博士（教育学）。日本アイビーエム（株）東京基礎研究所、法政大学社会学部講師、助教授、教授を経て現職。JST-RISTEX 高齢社会・プロジェクトリーダー（2011-2014）兼任。専門は認知心理学、認知工学、認知科学。著書は『注意と安全』（共編著、北大路書房）、『事故と安全の心理学』（共編著、東京大学出版会）など。

■ 原田先生へのインタビュー

—これまでどのような研究をされてきましたか？

私のベースは認知心理学で、博士論文では潜在記憶を研究しました。その一方で、マニュアルの研究をお手伝いしていた関係で、大学院が終わった後は民間の基礎研究所に入りました。それ以来、「使いやすさの認知科学」というテーマで、人がモノに関わる時、認知的なプロセスとして何が起きているのか、そこからモノのデザインをいかに良くするかといった研究をしています。

大学に移った後も基礎研究と使いやすさ研究を「車の両輪」という形でしてきました。使いやすさ研究については、オフィス機器などを使いやすくするにはどうすれば良いかを知るために、発話プロトコル分析を用いた研究を中心に行いつつ、対話システムやロボットを題材に「使いやすさとは何か」という研究もしています。

—現在は特にどのような研究を

されているのでしょうか？

近年お声が多くかかっているのは医療現場における医療事故防止です。非常に活動密度の高い現場でなぜエラーが起こるのか、どうすれば事故を防げるのかという研究で、リアルな活動の場での人の認知的なプロセスが気になっています。もう一つは高齢者にとっての使いやすさの研究です。高齢者さんに機器を使う課題に取り組んでいただきながら、今どのような状況か発話していただき、どのように問題解決を行っているかを若年成人と比較しながら分析しています。そこから刺激を受けて、今は基礎研究も、認知的加齢の研究が7割位になり、どんな実験をする時も、高齢者さんと若年群を比較しないと面白くないと思うようになってます（笑）。

在外研究でラリー・ジャコビー（Jacoby, L.; 当時 McMaster 大学）先生やリン・ハッシャー（Hasher, L.; Toronto 大学）先生のところに行っていたのですが、そこで高齢者さんに実験をしてみると、大学卒で元氣

に生活している高齢者さんたちが、現役大学生と同じ課題をしても、こんなに違うの？という現象がみえてくることを知りました。比べると、大学生はなぜだかわからないけど「優秀」なわけです。加えて、高齢者さんは評価懸念が高いので間違えたくないと思う、さらに変なふうになってしまう。

一方、医療現場でもとても忙しい看護師・研修医の人たちは睡眠時間3時間だったり、緊急時に焦っていたりするときに、20.0ml/hと入力すべきところを200ml/hと間違えてしまう。これは危険ですよ。若年群でも自分が冷静に考えた通りのことがいつでもできるかという、そうではないのだということがわかります。

高齢者さんが間違えたくないと思っただけでうまくいかないのと、間違っただけでいけないと思う医療現場の人がふと間違ってしまうというのと、同じメカニズムではないですが、実験室で大学生だけを対象にした「フル機能中の認知」心理学だけをやっていたら、ほんとの世の中を説明できる心理学にならないというのを強く感じます。

—基礎研究に医療現場、高齢者と、ずいぶんフィールドは異なるようにみえますが、何か共通点があったのでしょうか？

フィールドについてはお声をかけていただいて、研究をしているうちにだんだん関係性がわかってきたという感じです。自分の中に面白いと思うものがあった、それが外側の問題に触れたときに「あ、私が面白いと思っていたのはこれだ」とみえてくるんです。そうして見つけた面白いと思うものを重ね合わせてみたとき、自分にとっては何が面白いのかを自分の中で落とし込むプロセスが出てくる。うまく言葉にはできなくても自分なりのテーマ、リサーチ・クエス

ションをもっていると感じられます。私はそれを学部生の頃に参加した研究会で安西祐一郎先生に教えていただきました。自分を知るのが大事、だから自分の中の「面白いと思うフィルタ」が何なのかを知ることが大切だよと言われて。なんだかすごいと思ったのを覚えています。その当時、日本認知科学会の創成期ですが、お会いした先生方は皆さん、研究は面白くなくちゃだめという意識をおもちでしたね。

——複数のフィールドをもっていることの利点はなんですか？

実は「車の両輪」でやるというのも自分で編み出したわけではなくて、私が教えていただいた先生方がやっていたのです。私の所属は記憶の研究室（太田信夫先生）で、お互いにいろいろな人の手伝いをするのが当然というラボでした。また筑波大学は講座制がなく、隣の海保（博之）先生にもいろいろご一緒させていただきました。その海保先生は「いつも二つテーマを立てておかないと不安なんだよ」と仰っていて、なるほど、そうすれば良いんだと思うようになったのかもしれませんが。

それぞれを一人で全部やっているわけではなくて、大事なのは仲間なんですよ。先輩や友達、先生のお手伝いなど、いろいろな人と研究をしているうちに、これも自分のテーマに関係するわ、みたいに、そういう仲間がいて、折にふれて、これやってみない？というのを相互に持ち寄ってくるのが楽しいです。

——最後に、心理学に興味をもつ若い人にメッセージをお願いします。

心理学に限らず、いろいろな人と交流してほしいと思います。心理学って結局は「人間」の研究なんですよね。人が生きているところをいっぱい見て面白がろうよと

いうのが、若い人にぜひお伝えしたいことです。人それぞれ面白いと思うところは違うので、反応確率のモデルをみて面白い！というのでも良いのですが、最終的には人間を見ているという感覚や、人って面白いな、という経験を積んでいくことが面白い研究をしていく秘訣かなって思います。

■インタビューの自己紹介

インタビューを行った感想

原田先生へのインタビューは、高齢者を対象として使いやすさの研究をされている『みんなの使いやすさラボ¹』で行わせていただきました。ラボは明るい雰囲気の中で、日常のオフィス機器や調理機器なども研究対象として置かれており、いわゆる心理学実験室といった様子ではなく、日常生活に近いところで研究が行われているという雰囲気を感じました。

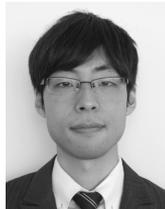
当日は、そこで行う実験について、ラボの学生さんと話し合っているところにもご一緒させていただきました。ここでは「こうするといいよね」「こうすると面白そうだね」という様子で話が進んでおり、インタビューにもあった通り、様々な人の考える「面白い」があったように思います。また、ラボの学生さんとお話する中でも、研究の意義はもちろん、ここが面白い、楽しいという発言が印象に残り、研究室全体でこの雰囲気が共有されているとも感じました。

私自身、研究に意義を見出すにはどうすればいいか、もっと幅広

く役に立つことをしたほうが良いのではないかと悩むことが多くあります。しかし、伺ったお話から、役に立つかどうかを考えることは当然としても、その根源に「面白いと思うから」があって良いということのを再認識しました。これは当然のこととも言えますが、先生に仰っていただいて、それで良いのだとさらに心強く感じています。今、どのような関心をもって研究に取り組んでいるか

私は、言語の理解と感覚運動情報との関係に興味をもっています。例えば「コップで水を飲む」といった文を読むと、多くの人がそれを行っている様子をイメージして理解すると思います。これは文の理解には、単語や文法の処理や知識の統合だけではなく、内容に関する感覚や運動の情報も関わっているためだと考えられています。一方で「ピッケルで氷を砕く」といった文では、文として理解できる人は多いですが、登山に関する経験があるかなどによってイメージできるものは異なってきます。そこで文の理解を通じてその内容（動作）を理解するとはどのようなことなのかということの研究をしています。これにより専門性の高い動作や技術を言葉で効率的に伝えるにはどのような情報や経験が必要なのか、「コツ」は言葉で伝えられるのかということをも明らかにしたいと考えています。

1 <http://www.tsukaiyasusa.jp/>



Profile — もちづき まさや

日本大学文理学部人文科学研究科 特別研究員。2009年、日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士前期課程修了。2012年、日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了。博士（心理学）。専門は認知心理学。論文は「行為意味知識は文理解の心的シミュレーションに影響を与えるか？」（共著、『心理学研究』第83巻第1号収載）など。